一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察

A STUDY ON RELATIONSHIP BETWEEN INSIDE AND OUTSIDE
OF HOUSE FOR SINGLE ELDERLY RESIDENTS

橘 弘志*, 高橋 鷹志**

Hiroshi TACHIBANA and Takashi TAKAHASHI

This paper aims to describe and analyze the behavioral environment of single elderly residents in house, focusing on locational relationship of the behavioral places (sitting, eating, sleeping, and communicating with others) in their house and inside-outside relations. Used method were mapping of plan of the houses of 24 subjects in two areas - town area and housing complex area, and interviews with them. Findings are as follows. 1) The residents formed territorial hierarchy (from public to private) in their houses related to distance from entrance. 2) Two types of relationship between the hierarchy and house form were found - 'town type' and 'housing-complex type'. 3) These types affected meaning of outside space that the residents contact to at their sitting place.

KEY WORDS: *The single elderly, relationship between inside and outside of house, sitting place, territorial hierarchy, meaning of outside space*

一人暮らし高齢者、住戸内外の関係、居場所、公私領域感、外部空間の意味

1. はじめに

1.1. 目的と背景

住居空間の性質は、物的環境の質のみで決まるものではなく、居住者の住まい方との相互関係によって定まってくる。物的環境によって居住者の住まい方は影響を受けるが、同時に居住者の側も物的環境に働きかけ、住まい方に合わせた環境を造り上げ、環境に意味を付加していく。そのように、環境と居住者が密接に関わり合っ

てできあがるものである。また住居空間の質は、住居の内部空間のみで完結して決定されるわけではなく、実際にはその外部の環境との関係によっても影響を受けるものである。よく言われているように、日本の伝統的な家屋は住居の内部と外部の境界が曖昧であり、内部と外部の環境は影響を与え合う関係にある。それは自然が内部に取り込まれやすいということだけではない。とくに下町のような高密度の居住環境では、近所の音や臭いが侵入してきたり気軽に醤油の貸し借りが行われるなど、外部の社会（地域社会）との接点が緩やかでもあった。

住宅内・外部の関係性として、ニューマン（1972）¹⁾は住宅近傍における領域感をプライベートからパブリックまで4段階に分けて考えているが、ここでは住居内部空間は一括してプライベートと見なされている。住宅内部の空間が均質でないことは、利用者の共用

性（公室－私室）・行為の文化性（ハレーケ）・行為の機能性（個人空間・作業空間・衛生空間²⁾）など、さまざまな視点から捉えられてきているが、これらの多くは外部空間とは独立した内部空間における秩序のあり方を扱ったものである。鈴木ら（1984）³⁾は、住居における生活の向きとアプローチの向きに注目して住宅内部と外部との関わりに言及しているが、これは住宅構造の性格によって外部空間に与える影響について論じたものであり、住宅内部に対する視点ではない。

現在急速に増加している高齢者の生活では、身体的条件や退職などによって自宅で過ごす時間が増加する可能性が高く、住居の環境はより重要な問題となってくる。このとき住居内部空間の質を完結したものとしてではなく、地域ケアなどの問題を考えると外部（地域社会）との関係の上で捉えていくことも重要と思われる。

本稿は、家族同士の関係に影響を受けない一人暮らしの高齢者の住居を対象とすることによって、外部空間との関わりを持った住居内部空間の質を捉えることを目的とする。また、異なる住居形態の異なる地域における住居での住まい方を比較することによって、外部との関わり方の違いによって生じる環境の質の違いを見出しているとするものである。まず前半では外部との関係によって生じる住居内部空間の秩序について捉え、後半ではその内部秩序と住戸形

* 千葉大学工学部デザイン工学科 助手・博士(工学)

** 新潟大学大学院自然科学研究科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Design and Architecture, Faculty of Eng., Chiba Univ., Dr. Eng.
Prof., Graduate School of Science and Technology, Univ. of Niigata, Dr. Eng.

態との相互関係によって現れてくる外部空間との関係と、その意味付けについて考察する。

1.2. 調査概要

A団地（集合住宅団地）とN地域（高密度住宅地）という性格の異なる2地域において、一人暮らしをしている65歳以上の高齢者の住宅を直接訪問して、調査を行った^{*)}。対象人数はA団地11人、N地域13人である（表1、2）。A団地はすべての住戸が団地の集合住宅であり、これに対してN地域は戸建て・長屋建て・マンション・アパート・寮などの住戸形態が混在している。調査内容は、住居の間取りおよびそこに置かれた家具・物の様子を採取し、普段良くいる場所や食事・就寝の場所を記録し、同時に家の中での生活の様子およびその時の外部空間との関わりの様子についてインタビューを行った（図1）。調査時期は1992年6～12月。

2. 行為の場と住宅内部のヒエラルキー

2.1. 場の類別

まず、居住者である高齢者が住居内空間を日常生活の中でどのように意味づけているのか、その一つの指標として、日常生活行為の場という考え方を導入する。基本的な生活行為である「食」「寝」の場に加え、ふだんの家の中での「居」の場、つまり家の中で座って落ち着いて居る場所、そして外部からの訪問者と応対する接客の場所（「客」の場）の4種類の場を分析の対象とした。ここで、本論では外部との関係による住戸内の秩序を捉えることが目的であり、趣味・仕事などの特定の行為・作業に特化した場所については、機能的側面が強く場所自体の物的環境（しつらえ・道具など）と行為との対応関係が強いだろうとの判断から、今回は分析の対象から外すこととした。

「食寝分離」とは公団住宅の設計概念の一つであり、現在でも住居設計の際にしばしば用いられる。しかし、住居での生活時間の長い高齢者を考えると「食」「寝」だけではなく、高齢者の「拠点」^{*)}や「座」^{*)}として取り上げられているような、ふだん家の中で「居」る場所の性質が重要になる。また、住宅内部と外部との関係性を表す一つの指標として、住居の中で外部の人にも開かれている場所である「客」の場を取り上げることとした。ただしここではその拠点性や座としての性格にはあまり踏み込まず、住居内部空間に展開される「居」「食」「寝」「客」の場の相対的な位置関係から、住居空間における公私領域性^{*)}に着目していく（図2）。

2.2. 場の重なりに見る場の質

(1) 部屋数と場の重なり

「居」「食」「寝」「客」の4種類の場の重なり方を見ると（表3）、1箇所にも重なっているものは3割弱であり（7例）、それ以外の事例では2箇所（16例）あるいは3箇所（1例）に分離している。これらの重なり方と居室数^{*)}との関連を見ると、場が複数箇所に分離する事例はすべて複数の居室を持つが、複数の居室があるからと言って場が分離するとは限らず、単純に居室数が多いほど場が分離されるという傾向は見られなかった。

(2) 「居」の場

「食」の場との関係を見ると、A団地・N地域のすべての事例で「居」「食」の場は重なるものであった。A団地の1事例で複数箇所の「居」の一つが「食」と重なるものが見られたが、それ以外はすべて「居」

「食」が同一の場所となっていた。

次に「客」の場との関係であるが、A団地の3事例およびN地域の1事例以外では、接客の際の客の座がしつらえられているなど何らかの「客」の場が認められた。それら20例のうち、A団地の8事例中6事例およびN地域の12事例すべてにおいて、「居」「客」の場が重なって観察された。それ以外のA団地の2事例のうち1事例は「居」の場のすぐ隣に「客」の場が設定されており、独立した「客」の場が見られたのは、1事例のみであった。

(3) 「寝」の場

「寝」の場はセッティングの固定性によって場の質が異なる。固定セッティングすなわちベッドあるいは万年床の事例は、A団地4例・N地域3例であり、可動セッティングすなわち布団就寝で昼間は片づけるという事例は、A団地7例・地域11例であった。

「居」の場との関係は、「居」「寝」一致^{*)}が両地域併せて7例、分離が17例である（表5）。「居」「寝」が一致するほとんどの事例では「寝」が可動セッティングであり、時間的には「居」の場と「寝」の場は重ならない。固定セッティングで常時「居」「寝」が一致しているのはA団地の1事例のみであった（表4）。

「客」の場との関係は、「客」「寝」一致^{*)}が7例、分離が13例であった。一致の事例はすべて可動セッティングで、時間的に見て「客」「寝」が重なることはない（表4）。「居」「寝」一致の唯一の事例は「客」の場が独立してしつらえられた唯一の事例でもあった。つまり全ての事例において「寝」「客」の場が同時に同所に存在することとはなかった。

(4) 場の質

これらの結果から、一人暮らし高齢者の場合、「居」「食」「客」の場がすべて重なることが多く、「居」の場は食事・接客などのさまざ

（表1、2）A団地、N地域の調査対象者

No.	年齢	性別	居住形態	居住歴	No.	年齢	性別	居住形態	居住歴
A-1	69	M	2K	29	N-1	80	F	戸建2階	43
A-2	78	F	2DK	30	N-2	81	F	戸建1階	52
A-3	79	F	1DK	9	N-3	80	F	戸建1階	64
A-4	68	F	3K	20	N-4	79	F	マンション	33
A-5	68	F	2DK※1	30	N-5	77	F	アパート	45
A-6	78	F	2DK※2	30	N-6	75	F	戸建1階	35
A-7	68	M	3DK※2	30	N-7	76	F	長屋2階	53
A-8	74	F	1DK	7	N-8	65	M	寮	3
A-9	69	M	1DK	5	N-9	65	M	長屋2階	15
A-10	85	F	2DK	30	N-10	65	F	長屋2階	36
A-11	67	F	2DK	30	N-11	65	F	戸建2階	30
					N-12	68	F	戸建1階	43
					N-13	67	F	マンション	7

※1: 接地型、※2: 片廊下型、
その他は階段室型

（表3）場の重なりと居室数

	事例数	居室数			
		1	2	3	4～
すべて1カ所に集中	7	1	3	3	0
2カ所に分離	16	0	7	7	2
3カ所に分離	1	0	0	1	0
合計	24	1	10	11	2

（表4）「寝」「客」の関係

	「居」「寝」		「客」「寝」		
	一致	分離	一致	分離	客」なし
「寝」固定	1例	6例	0例	6例	1例
「寝」可動	6例	11例	7例	7例	3例
合計	7例	17例	7例	13例	4例

(図2)「居」「食」「寝」「客」の場の位置

まな行為をも含む日中の中心的な居場所になっている。ただし全ての行為が「居」の場1カ所に集約されているわけではなく、「寝」の場を空間的に「居」と分離させていることが多く、空間的に一致している場合でも可動セッティングとして時間的に見ると分離されている。とくに「寝」「客」は空間・時間的に見て完全に分離されており、両者の場に対する居住者の要求が相容れないものであることが示唆される。

2.3. 場の位置関係に見るヒエラルキー

空間利用の上で特徴的と思われる「居」「寝」の場を取り上げて、これら二つの場の玄関からの位置関係に注目する(表5)。「居」「寝」の分離している17例中15例で、玄関と「居」「寝」が直列の関係にあってすべてこの順に並んでいた。つまり玄関から「寝」の場に至る際に必ず「居」の場を通ることになる。これには二つの意味が考えられる。一つは、「居」の場が玄関から「寝」の場まで含んだ住居内の動線の中心となっていることであり、居住者にとって「居」の場が住戸内のもっとも重要な拠点であることが示唆される。もう一つは、玄関を表として考えると「寝」をなるべく奥に配していることである。残り2例では「居」と「寝」とが並列に置かれているが、やはり住戸内のもっとも奥に「寝」の場が設けられている。ここに、居住者が空間に与えている秩序付け、居住者が意識している空間の領域性の違いを見て取ることができる。

玄関は外部に直接接しており、他者を応対したり迎え入れる場所として、住居内でもっともパブリック性が高い場所と言える。「居」の場は「客」の場と重なることが多く、知人とはいえ他者が入り込

(表5) 玄関から見た「居」「寝」の関係

玄関と「居」「寝」	A団地	N地域	合計	
居寝一致	3例	4例	7例 29.2%	
同室で隣接 (寝が奥)	2例		2例 8.3%	寝が奥 15例 62.5%
別室 (寝が奥)	5例	8例	13例 54.2%	
別室 (並列)	1例	1例	2例 8.3%	

▶ 玄関 ○ 「居」の場 □ 「寝」の場

(図3) 住居内空間に展開される場と領域的ヒエラルキー

み他者の目にさらされる場所であり、相対的にパブリック性が高い場と思われる。これに対し「寝」の場は、他者の目に晒されない自分だけの空間であることが求められる、プライベート性の高い場所である。外部に直接面する玄関(表)から奥に向かって「居」「寝」の場がこの順に配されるということは、居住者が住居空間の中で、<表=パブリック>に対して<奥=プライベート>という相対的な領域性を意識しており、パブリック性の高い「居」の場とプライベ

(図4)「居」の場に対する「外部情報の向き」「アクセスの向き」

ト性の高い「寝」の場をそれぞれ領域性に対応した空間に設けることで住居空間を秩序づけていることが示唆される(図3)。

このような住戸内部空間の領域的ヒエラルキーは、A団地・N地域の双方において住戸形態にかかわらず、住戸の接する街路空間との接点である玄関との位置関係で定まっているように見える。街路空間は見知らぬ他者が通行する可能性のある(そして実際に通行している)パブリックな空間であり、そことの接点である玄関のパブリック性が住戸内部空間の領域性に影響を与えていると考えられる。

3. 住宅内の居場所における外部との関係

3.1. 住居の向き

住宅内外の関係を高齢居住者の日常生活のレベルから捉えるため、住居内での居住者の重要な居場所として浮かび上がってきた「居」の場における外部との関係に焦点を当てる。ここで「居」の場と外部との関係を示すために「外部情報の向き」「アクセスの向き」という二つの方向性を考える¹⁰(図4)。

「外部情報の向き」は「居」の場が外部空間から対される向きである。これは単に視覚的な方向性を示すだけではなく、聴覚的なものも含めて外部から情報の入ってくる向きを示す。外部に対してたとえば背中を向けていても、戸が開いていて外の音を感じることができるならば、その方向が外部情報の向きとなる。必ずしも一方向のみに限定されるとは限らない。また、居住者が日中もカーテンを閉め切るなどして外部からの情報を遮断している場合、外部情報の向きを持たないことになる。つまり、これは居住者が外部に対して意識を向けている方向であり、住宅の構造に大きく影響を受けるものの、

(表6)「外部情報の向き」と居住タイプ

	正面型	両面型	背面型	こもり型
住居の向きの関係				
外部情報の向き	アクセスと同方向	同・逆の両方向	アクセスと逆方向	なし
居住タイプ	まち型		団地型	

それだけで決まるわけではなく、居住者の外部との関わりに対する要求を反映しているものである。

「アクセスの向き」は玄関から「居」への向きである。外部から住居内部の自分の居場所へいたるアプローチの方向であり、前述したようにこの向きに沿って(さらに奥に向かって「寝」の場に向けて)、住居内部空間にパブリックからプライベートにいたる領域性が形成されていると考えられる方向である。

3.2. 「まち型」居住と「団地型」居住

二つの方向性の関係は4種類に分類できる。「居」から見て両者の向きが重なる「正面型」、「居」に対して両者が反対方向となる「背面型」、外部情報の向きが2方向あり一方がアクセスの向きと重なる「両面型」、「外部情報の向き」のない「こもり型」である(表6)。

両地域におけるそれぞれのタイプごとの例数をみると、A団地では1例を除き「背面型」あるいは「こもり型」であるのに対し、N地域では「背面型」「こもり型」が1例ずつある他は「正面型」ある

いは「両面型」となっている。ここから、A団地に多い「背面型」「こもり型」を合わせて「団地型」とし、N地域に多い「正面型」「両面型」を合わせて「まち型」とする。これは住戸の物理的形態の型を示すものではなく、居住者の居場所や外部に対する意識を含んだものであり、それらが複合されて現れてくる住み方（居住）のタイプを意味している。

3.3. 外部情報の質の違い

この2タイプは、「居」の場において外部から得られる情報が質的に異なっている（表7）。「団地型」では、窓からの眺め・景色など、他者との関わりや実際に動いている社会についての情報ではなく、居住者が眺める風景としての情報がほとんどである。外部にあって居住者が直接関与することのない情報を一方的に取り入れている。これに対して「まち型」では、人の動きや街路の音や雰囲気など、現にそこで活動しているさまざまな他者の様子が伝わってくる情報である。より直接的な、知り合いなどとの交流を含んだ情報も豊富であり、つまり情報のやりとりの可能性が含まれている。

このような外部情報の質の違いは、2タイプのアクセスの向きと外部情報の向きの重なり具合の違いが大きく関与していると考えられる。前述のようにアクセスの向きは住戸内部の領域性と密接に関わっており、外部からもたらされる情報がパブリック・プライベートのどちら側からのものか、という差が現れることになる。それは居住者にとっての外部空間の意味の違いを生み出している。

「団地型」では、居住者が居室にいながら関わり合う外部とは、アクセスの向きとは逆向きのプライベート性の高い外部であり、他者との関わりがないという点で個人的な外部と言える。これに対して「まち型」では、居住者が向き合う外部とは、自分と他者が共用し自分が直接関与している、または関与する可能性のあるパブリックな外部（＝社会）であり、居住者は住戸内に居ながらにしてそこからの情報に接している。「団地型」では住戸内においては社会との接点が希薄にならざるを得ないが、「まち型」では「居」の場自体が社会との接点を持っていると言える¹¹⁾。

3.4. 住戸構造の影響

居住タイプと住戸構造の関係をみると、「団地型」は積層型の団地・マンションに、「まち型」は接地性のある長屋・戸建住戸に多くみられるように、住戸構造に大きく影響を受けている。とくに団地・マンションなどの場合、居室が主に南面しているのに対してアプローチは主に北側から取られるため、「外部情報の向き」「アクセスの向き」二つの方向性がもともと重なりにくい構造となっており、「団地型」となりやすい¹²⁾。

「まち型」では、接地性が高いことに加え、居室がアクセスの向きに開いている住戸構造が認められる。ただし、居住者はそれ以外の場所に「居」の場を取ることも可能でありながら、居住者自身がアクセス側の外部と直接・間接的な関係を保ちやすい場所を選択していることが多く、住戸構造のみに起因するわけではない。

また、パブリック性の高いアプローチ側について住戸内外の境界の構造をみると、「団地型」住戸は扉一枚で遮断されている。これに対して「まち型」住戸は、街路に対してある程度開放的な構造を持っているが、内外の関係は決して何もかも筒抜けのオープンさではない。表8に見られるように、半分開いた戸、格子の入った窓、入口のカーテンやついたて、街路に面して置かれた植木鉢などの植物に

（表7）「まち型」「団地型」における外部情報

まち型居住の外部情報
夏は戸を少し開けておく。玄関のTV付きインターホンの外の様子が分かる。窓を少し開けておく。人通りなど外の様子はなんとなく分かる。路地の様子が窓から分かる。近所の人が自分で勝手に入ってくる。窓の外の色を見るのが好き。緑越しに歩いている人の様子が分かる。窓を少し開けているので、外を人の通る様子が分かる。声も聞こえる。路地の様子はよく分かる。近所の人が外から声を掛けてくれる。戸は開けてカーテンのみなので、外の音や雰囲気が感じられる。玄関は開けてカーテンのみなので、外の様子が分かる。玄関は開けたままなので、後ろで人が通ると少し気になる。
団地型居住の外部情報
外の景色がよく見える。隅田川の花火を見に友達遊びに来る。向かいが幼稚園なので人と顔を合わせることはない。昼間はにぎやか。窓は開けておく。外の眺めがいい。東京中の夜景が見える。向かいに建物がなく、窓からの眺望がいい。外の梅林や夜景も見える。向かいの人と顔が合うことがあるが、なるべく見ないようにしている。

（表8）「まち型」居住に見られた柔らかな境界

情報の入りやすさ	玄関の鍵は開け放し／戸や窓を少し開けておく
情報のコントロール	格子の入った窓／玄関は開けてカーテンのみ 玄関は全開でスダレを掛ける／玄関の衝立
外部に対する表出	窓や玄関の外に植木を置く

（図5）「まち型」居住と「団地型」居住の外部との関わりのモデル

よって柔らかな境界が構成され、外部の音や雰囲気などは取り入れながら視線を遮るなど、内部に取り入れる情報がコントロールされている。（それは同時に内部から外部に漏れ出す情報をコントロールしていることでもある。）住戸の開放性と居住者側のコントロール可能な境界構造によって、居住者は居ながらにして社会との接点を持ち得るのであり、それが「まち型」居住を成り立たしめていると言える。図5に2タイプの住戸内外の関わりをモデル的に示す。

3.5. 住戸内外の間接的コミュニケーション

「まち型」居住においては、「居」の場の位置と境界の柔らかさによって、住居を外部に対して完全に遮断してしまうことなく、また完全に開放することでもない関係が形成されている。外部の情報がコントロールされた形で内部に取り込まれつつ、内部の雰囲気もまたコントロールされた情報として外部に発信されている。植木などの表出が住んでいる人の情報をより直接伝えることもある。住戸の中にいる人、まちを歩いている人の双方にとって、お互いの情報が（直接・間接的に）やり取りされているのであり、いわば住宅内外の間接的なコミュニケーションが成り立っていると言える¹³⁾。これは、外部の人が住戸内部の情報にアプローチしやすいことでもあり、近所の人などがわざわざ訪ねるという意識なしに気軽に居住者の様子を窺い知ったり声をかけたりすることを可能としている（それが「まち型」居住の外部情報にも現れている）。住居にとどまらざるを得ない居住者にとって、日常生活における心理的なサポートとして¹⁴⁾、地域ケアという観点からも重要性が示唆される。

4. まとめ

- (1) 一人暮らし高齢者の住居での生活の中で、「居」の場が食事・接客なども含む最も重要な居場所となっており、住居の中でも動線の中心部に置かれることが多く見られた。ただし生活行為のすべてが「居」の場1カ所に集約してしまうわけではなく、住居内部空間の秩序付けとして、「居」の場と「寝」の場とを分離する傾向が見られ、「居」の場と「寝」の場に対する要求の違いが見出された。
- (2) 住宅の内部空間は、外部のパブリックな空間に対してプライベートな空間として一様に捉えられるものではなく、そこには街路に面するアプローチの側から奥に行くに従って次第にプライベート性を高めていくという領域性が形成されていた。これは外部との関係によって住居内部の空間の質が影響を受けた結果と考えられる。居住者はこの領域性に従ってそこで行う行為を選択しており、もっともプライベート性の求められる「寝」の場をもっとも奥に、日中の居場所として相対的にパブリック性が高い「居」の場を手前に位置付ける傾向が強く見られた。
- (3) 「居」の場における外部との関わり方に「まち型」「団地型」の2つの居住タイプが見い出された。両者では外部情報の質が異なっており、「パブリックな外部」「プライベートな外部」といった外部空間自体の意味が異なることが示唆された。居住タイプは住戸の物理的構造と内部の領域性との相互関係から現れるものであり、その結果外部との関係において、「団地型」は外→内の一方的な関係であるのに対し「まち型」は居住者の選択及びコントロールが可能となっているという違いが現れてくる。
- (4) 「団地型」は住居内と外部環境との接点が希薄で互いに独立しているのに対し、「まち型」は緩やかな境界によって住戸内外が相互に影響を与えあっており、いわば間接的なコミュニケーションが成り立っていた。それは外部の人にとっても住戸内部の情報にアプローチしやすく、外部の人が気軽に中の様子を窺ったり声をかけたりしやすい環境の形成に寄与していると考えられる。
- (5) 住戸内での居住の仕方や外部との関わり方は、内部空間の秩序を形成するとともに外部空間の質にまで影響を与えている。とくに「まち型」居住は、居住者が住居内に居ながらにしてパブリックな外部情報（あるいは社会）との接点を持ちうる居住タイプである。それはとりわけ身体的機能が衰えて自由に外出しづらくなった場合に、住居内で社会と接しながら過ごしていくことが可能となりやすい点で、今後の高齢者の居住タイプとして考慮すべき意味を含んでいるのではないだろうか。それを支える物的環境としては、アプローチ側に対しての住戸の開放性・居住者のコントロール可能な柔らかい境界・外部との関係を持ちやすい居場所となる空間などが示唆されたが、それだけではなく街路空間の社会性や多様性など住戸単体を越えた議論が必要であり、今後の研究上の課題である。

註

- *1) 文献1参照。なおS. Howell (1980、文献2) はこの領域分けを建築の内部空間に適用しているが、ここでの対象は多数の居住者のための居住施設であり、個人の専用する各ユニットについてはプライベートとして扱われている。
- *2) 文献3
- *3) 文献4
- *4) 本調査は東京大学高橋研究室で行った「高齢者の住空間に対する環境行動的研究」の一環として行ったものである。ここでは住戸から地域に至る環境を住空間として捉えており、住宅形式は異なるが地域の面積や人口の似た2地域が対

象として選ばれた。地域的な行動環境については文献5参照。

- *5) 文献6など
- *6) 文献7
- *7) プライベートおよびパブリックという公私領域性について、通常の言葉の使い方としては個人が専用して使用する領域をプライベート、外部のさまざまな人によって利用される領域がパブリックとされ、これによると個人の（特に一人暮らしの）住居はプライベート領域となる。ここでは住居内部のより微妙な領域性を表現するため、自分一人だけの空間で他者の目に晒されることのない領域あるいはそのような性質をプライベートとし、さまざまな他者の目に晒される可能性があり他者を意識する（せざるを得ない）領域あるいはそのような性質をパブリックとした。
- *8) 居室数のカウントについて、それぞれ独立した個室の他、4畳半程度以上のDKがあつてそこに座が発生する可能性のある場合にも居室として数えた。2部屋を連続して一つの空間として用いている場合、ここでは行為の場の形成されるポテンシャルとしての居室数として、2部屋としてカウントした。
- *9) 「寝」の場と他の場との一致・分離については、固定セッティングの「寝」についてはその寝具上で「居」や「客」の場が発生する場合を、可動セッティングについては寝具を用いる際に「居」や「客」のセッティングを移動（または撤去）させる必要がある場合を、それぞれ「一致」とした。
- *10) 鈴木ら（1984）は住居に「アプローチの向き」と「生活の向き」という二つの方向性を見出し、これによって住戸形態を「正面型」「背面型」「両面型」の3種類に分類している（文献4）。本稿で用いた「外部情報の向き」と「アクセスの向き」はこの視点を応用したものであるが、住戸形態のみで定まるものではなく、居住者の「居」の場との関連で捉える概念であることから、異なる用語を用いた。ただし二つの方向性による分類の仕方は重なる部分が多く、「正面型」「背面型」「両面型」はそのまま用いることとした。
- *11) 「居」の場自体が社会との接点を持っていることの重要性を扱ったものとして、文献8があげられる。ここでRowlesは、寝たきりの高齢者が窓から見る景色の中にさまざまな社会的情報が含まれていることによって、今現実に向いている社会との関わりを持つことの重要性について述べている。
- *12) ただし事例N-4に見られるように、（やや不自然ではあるが）マンションであってもアプローチ側に常に意識を向けるような住み方も不可能ではない。居住タイプは住戸形態という物的環境と居住者の要求とが相互に関わり合って現れてくるものと言えるが、従来の団地・マンションは居住タイプを一方的に限定しやすい住戸構造だと思われる。
- *13) このような「まち型」居住が多く見られるN地域では、社会的関わりのかきかけが多く、また発見の多い多様性ある環境が維持されている可能性が考えられる。その結果、街路が単なる目的地への通過路ではなく、さまざまな相互作用の行われやすい空間となり得ているのではないだろうか。文献5で橋（1997）は住商工の混在した高密度既成市街地における道の使われ方を調査することによって、道が居住者によって「単なる経路以上の意味を持ち、何らかの相互関係が起こりうる場として捉えられている」と述べている。
- *14) この調査対象者は比較的高齢者の自立度の高い高齢者がほとんどであった。中に事例N-2のように、片足切断のため必要時以外は住居内で過ごさざるを得ないが、「まち型」居住であることによって近所の人らの直接・間接的なサポートが受けられやすく、自立した生活が可能となっている事例も実際に見られた。

参考文献

- 1) O. Newman: Defensible space, Macmillan, 1972
- 2) S. Howell: Designing for aging - pattern of use, MIT Press, 1980
- 3) 池辺陽：デザインの鍵—人間・建築・方法、丸善、1979
- 4) 鈴木成文他：いえとまち、鹿島出版会、1984
- 5) 橋弘志他：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディ、日本建築学会計画系論文集、No.496、1997
- 6) 片岡正喜他：住生活拠点の存在確認と拠点のとり方—高齢期における住生活の拠点に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、No.460、1994
- 7) 古賀紀江他：一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察—高齢者の住居における居場所に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、No.494、1997
- 8) G. D. Rowles: The surveillance zone as meaningful space for the aged, The Gerontologist, 1981

(1998年3月10日原稿受理、1998年7月31日採用決定)